

Newsletter

August 2010

<http://www.aack.or.jp>

目次

訃報 梅棹忠夫氏死去……………	1
アンナプルナ内院トレッキング (平成二十二年 四月一八日～五月一七日) 谷口 朗……………	1
ペルーアンデス・ブランカ山群 トレッキング 前田 司……………	5
「北極の自然と地球環境」補遺 伊藤 一……………	13
ノシャック初登頂五十周年記念会 開かれる……………	16
「梅棹忠夫先生をしのぶ会」の おしらせ……………	16
編集後記……………	16

訃報 梅棹忠夫氏死去

AACK名誉会員、日本山岳会名誉会員、国立民族学博物館顧問、京都大学名誉教授であり、文化勲章受章者である梅棹忠夫氏が七月三日老衰のためご自宅で死去された。亡くなられる直前までご家族と話をされており、九〇歳に

アンナプルナ内院トレッキング

(平成二十二年 四月一八日～五月一七日)

谷口 朗

この春アンナプルナ内院を訪れた。

メンバーは当会員二名と林学の同窓生三名の計五名平均年齢七十二歳のルートルパーティ。

現地では予期せぬバンダ(ゼネスト)に遭遇しポカラ出発から帰着まで全行程徒歩を余儀なくされた。しかし全員長年の勤めのあと三人は更に地域のボランティアとしてのお勤め(自治会役員)までこの三月に終了していたので日程的にも気分的にも十分余裕のあるものであった。

概要は既にAACKホームページ

なられ目もご不自由ではあったがまだまだ著作への意欲もさかんであったとのことである。AACK会員一同謹んで哀悼の意をささげます。なお告別式は近親者のみで行われた。

AACKニュースレターでは梅棹忠夫氏の追悼と業績、それを受け継ぐ後継者の思いなどを中心とした別冊を発行する予定です。

に掲載されたがニューズレターからも執筆の依頼を受けた。

今回は数あるネパールのトレッキングルートの中でも最もポピュラーなものなので詳述は避けHPで触れていない事柄を中心に述べてみたい。



アンナプルナ 1



アンナプルナ南峰を背景に

メンバー…
 谷口 朗 (L) A A C K 七二歳
 福本 昌弘 (S L) A A C K 七二歳
 迫間 敏昭 (クローネ／雲南懇) 七三歳
 喜多山 繁 (クローネ／雲南懇) 七〇歳
 小山 修夫 (クローネ／雲南懇) 七三歳
 ガイド一名 (アムサン・シエルパ)
 ポーター四名 (ビル・シエルパ他)

行動記録

四月一八日 (日) 成田発ーカトマンドウ
 CX501/CX6730 インターナショナルGH
 一九日 カトマンドウ滞在 シーガルトラベ
 ル訪問
 二〇日 カトマンドウ滞在 ポカラへの

チャーターバス手配

二一日 カトマンドウーポカラ チャーター
 バスにて グレーシア ホテル
 二二日 ポカラ サランコット往復 国際山
 岳博物館 蘭花飯店
 二三日 ポカラ (7:30)ーサランコットーノー
 ダラ (16:30) ゴーチャンロッジ
 二四日 ノーダラ (7:30)ーダンプス (11:30)
 ホテル グリーンランド
 二五日 (日) ダンプス (7:30)ーランドル
 ク (13:30) ホテル ハンググリーアイ
 二六日 ランドルック (7:30)ージヌーダラ
 (11:30) 温泉往復 ジヌーGH
 二七日 ジヌーダラ (7:00)ーシヌワ (12:45)
 ヒルトップロッジ
 二八日 シヌワ (7:00)ードーバン (11:00)
 アンナプルナアプローチ
 二九日 ドーバン (6:50)ーデウラリ (11:10)
 バガルまで往復 (13:00ー14:00) デウ
 ラリGH
 三〇日 デウラリ (7:00)ーマチャプチャレ
 B C (10:00) 3900mまで往復 (10:40ー
 12:20) マチャプチャレGH
 五月一日 マチャプチャレBC (3:50)ーア
 ンナプルナBC往復ーマチャプチャレBC
 (12:00) (連日午後から夜にかけヘビーシャ
 ワー)
 二日 (日) マチャプチャレBC (7:15)ードー
 バン (13:00) アンナプルナアプローチ
 三日 ドーバン (7:00)ーチョムロン (13:40)
 エクセレントビュー ホテル
 四日 チョムロン (7:00)ーガンドルック

(14:00) ヒマラヤホテル

五日 ガンドルック滞在 グルン族博物館
 六日 ガンドルック滞在
 七日 ガンドルック (6:50)ータダパニ
 (11:20) フィッシュテイルビュウトップ
 八日 タダパニ (5:40)ーブレパニ (11:15)
 ホテルツクチェピークビュー
 九日 (日) ブレパニ (4:00ー6:30) プー
 ン
 ヒル往復 (7:30)ーコレ (14:00) シー
 ユウロッジ
 十日 ヒレ (6:45)ービレタンチーチャン
 ラコットールムレ (12:30)
 一一日 ルムレ (6:40)ーノーダラーカパ
 ウ
 デイ (13:30) パラデイズGH
 一二日 カパウディ (7:00)ーレークサイド
 (11:00) 船にて グレーシアホテル
 十三日 ポカラ滞在 ポカラ (7:30) 日本
 寺院ー洞窟ー滝など 夜伏見さん宅
 十四日 ポカラーカトマンドウ チャーター
 バスにて インターナショナルGH
 十五日 カトマンドウ滞在 パタン往復
 一六日 カトマンドウ ホテル 18:00 発にて
 空港へ CX6729/CX504
 一七日 (日) 成田着
 **一人当たり費用…円貨 十二万八千円
 外貨 千五百七十USDル

今回は成田から

今までは関空からバンコック経由翌日昼に
 着くタイ航空を使用したのが今回は全員関東勢
 なので初めて成田ー香港ーダッカーカトマン
 ドウのキャセイを利用した。

その日の午後一〇時ごろの到着となるがこの時間帯は他便が少なくまた市内は涼しく予想外に快適であった。

また、いつも空港で慌てて記入しているビザフォームを事前にインターネットで取得記入しておいたのでスムーズに通過出来た。

ヘリコプターの事前手配と現地エージェンント
トレッキング中の緊急時、特に我々のような高齢者メンバーでは如何に早くヘリを手配出来るかが生死をわける。現地の電話一本でヘリを飛ばして貰うため今回も今までと同じエージェンントを使いヘリの事前手配に関する了解を取り付けた。我々は阪本方式と呼ぶ。



ダウラギリ北東稜とツクチュ

衛星携帯電話

多少重たいがスラーヤ衛星携帯を持参した。今回のルートでは一番高所ABCまで全域で通常の携帯電話が使用可能であり電波の悪い所でも少し移動すれば通話可能である。日本から持参した個人の携帯も国内国外とも通話可能で有ったがネパール国内ではローカルの携帯の方が少し掛かり易いようだ。結果的に衛星携帯は不要であったがネパールでも他のルートや登山の場合は必携となるう。

―衛星携帯で救命―

一昨年ロールワリンで重度の高度障害で動けなくなった単独の日本人に遭遇、ガイドか



Poon Hill からのマチャプチャレ

ら要請を受け我々は高度順応トレーニングを中断帰幕し衛星携帯を貸与した。翌日のヘリで救出され一命をとりとめた。お礼の言葉はないが。

携帯メール

携帯メールが一番便利な筈だが持参した個人携帯からのメールは国内外とも使えなかった。インドでは場所により使えるようだ。

健康診断とY先生

今回最長老の小山さんは2年前まで海外でスキューバダイビングをやっており帰国とともに七〇歳を過ぎて山に転向した異色のメンバー。

毎月の国内登山には欠かさず参加意欲は十二分にあったが人間ドックの検診結果を掛かり付けの医師では判定出来ずデータを揃えて斎藤(Y)先生にご判断を仰いだ。結果条件付でOKとなったが最後はどうしても行きたいとの本人の強い意志で実現できた。

小山さんは体重五十キロにみたく肺活量二千八百ccだが酒に強く夜は一旦寝れば朝まで起きない。

全ての準備が完了した後でただ一人不参加となった竹内さんは循環器系の再検査の予約が間に合わず時間切れとなった。検診の時期は余り早すぎても遅すぎても問題が起こる。

両替

カトマンドウのタメル地区には多くの両替屋があり毎日レートが公表されている。どの

店も同じレートであるが金額が大きければネゴ次第となる。今回も福本・喜多山さんのコンビでハードネゴの結果公表レートより4%程度良いレートで換金出来た。ただ両替屋には手持ちのルピーが不足していたようで、差し出したドル紙幣を全て持って走り去つたので一瞬持ち逃げされたと言われたよし。通常朝一〇時からの開店だが探せば六時ごろから開いている店もある。

バンド

いままでもネパールでの山への行き帰りに必ずと言ってよいほど長時間道路封鎖をされた。

これは地方の住民の中央政府への何らかの要求のためバス会社への要望といったそれほど深刻性の無いものであった。

今回は交通のみでなく学校や公官庁もすべて閉鎖所謂ゼネストで今までのものと様子が全く異なり緊張感がありまた長期化或いは終息してもまた再燃の懸念のあるものであった。

マオイストの軍隊が条件付きで武装解除に応じたがその条件が実行されていないことなどを含めて現政権に対し色々な要求をしているようだ。

ロッジの対応

今回のルートには随所にロッジが完備されており食料・テントなどを持参する必要は全く無い。

ネパールの国花でもある石楠花（ラリーグ

ラス）の満開は過ぎていたのでトレッカーは激減する時期であった。

我々は全員高齢者なので常に一人一部屋を希望したがいくら余裕があつても即五部屋をOKしてくれるのは稀で通常は三部屋せいぜい四部屋しか取れなかった。

部屋代は二百〜四百ルピーと安くして飲食代で儲けているスタイルなのでやむを得ないのかも。

我々も三千米以下では毎日夕方五時頃からロキシタイムをつくりつまみの料理をふんだんに注文し売り上げに大いに寄与した。

チョウタラー

ネパールの山間の、村の坂道にチョウタラーという休む所がある。そこには木陰が出来るように菩提樹等がうえられており、丁度ポーター達が荷物を置くのが便利のように段差を付けた休憩所である。又村の女性達のお喋りの場所でもある。このチョウタラーは死んだ故人を偲んで遺族が村の坂道に寄贈したものである。（福本）

小山さんはチョウタラー毎に休みを要求するので仇名が『チョウタロウ』となり彼は迫間さんを次男の文次郎（文句が多いので）数字に強い喜多山さんには三男の算太（三三太）と命名、クローネ三兄弟による強力な休憩ねだりの抵抗勢力が誕生した。

山菜

昨年のランタン・ヘランブーでのポータービルシエルパは抜群の料理名人。今回も同行

してくれたので随所でコゴミ・ワラビ・ミヤマイラクサなどを時間に任せ採取、ロキシタイムの素晴らしい肴となった。この他今回はネガリのタケノコやキノコ類などが宿の食事に並んだ。

他にサラダ菜のような現地名ジプロロヤサトイモ科と思われる三枚葉のバーゴやウワバミソウなどがあつた。

ただしミヤマイラクサの綺麗な緑色のスープは飲み過ぎれば強烈な食あたりとなるので要注意。

ワラビのみはストーブで乾燥させポーターの土産となった。

ダウラギリ登頂五十周年記念式典と伏見さんご夫妻

Y先生から紹介頂いたポカラ国際山岳博物館の伏見さんには往路博物館でお会いし館内を案内頂いた。一昨年のほぼ同じ時期にはポカラの町からマチャプチャレとアンナプルナ連峰がはつきり見えたが今回は一度も見えず、伏見さんによれば最近は見えない日がほとんど増えており国内事情に加えインド・中国からのスモッグの影響との説を開示されていた。

夜は市内の中華料理屋『蘭花』にご夫妻を招待し歓談した。

トレッキングを無事終えポカラに帰つて来た翌日ネパール山岳協会と国際博物館の主催でダウラギリ登頂五十周年の記念行事が予定されていた。この忙しい中、ご自宅への招待を受けた。

伏見さんは北大から名古屋大学で氷雪の研究をされ現在はJAICAのシニアボランティア。奥様はインドのカメット山群の七千米峰の登頂者。夕食には我々の他にJAICAの若い女性二名とダウラギリ式典に日本から一人招かれている群馬の八木原園明氏も同席された。氏はダウラギリの他アンナプルナー南壁冬季初登攀やエベレスト冬季初登攀などでも有名。

式典には一九六〇年の初登頂者で悲劇のK2でも有名な登山家、クルト・デームベルガー氏が参加、新聞に大きく取り上げられていた。

ポカラのダルバート

ポカラのホテルにはランドクルーザー二台とAC付きの中型バスの新車があり特にこのバスはポカラ市内やカトマンドウまでの足としてチャーターし重用した。大変快適でかつ経済的であった。今回いたる所で現地食のダルバートを食べたがこのバスの運転手が案内してくれたポカラの(タカリーの)レストランのダルバートは旅行中で一番の逸品であった。看板がすべてネパール語なので我々だけでは見つけにくいのがNEWROADにある『JANAPITY HOTEL』内にある。

我々が泊まったホテルの主人はグルンの優秀な実業家のように日本語堪能、奥様は日本人だが出産のため里帰り中であった。

岩塩

ヒマラヤ(チベット)の岩塩は色々な色の

ものがありカトマンドウの土産の定番。日本に持ち帰ってから砕いた方が綺麗な面が出るので1キロ程度の塊を買うことにした。

最近手荷物のオーバーウエイトが非常に厳しくなり飛行機に乗る際には登山靴を履き重たいものはサブザックで機内持ち込みとしている。

今まで何の問題も無かったが今回は手荷物

ペルーアンデス・ブランカ山群 トレッキング

前田 司

傘寿を迎えた斎藤淳生氏が、アンデスにも行っておかないと、アンデス高地についてはいまや「秦斗」と呼ぶにふさわしい本会会員山本紀夫氏に相談されたのがこの山行の発端である。幸い山本氏はこの七、八月、「熱帯高地環境における家畜化、牧畜成立過程に関する学際的研究」の調査をペルーアンデスにておこなうという。どうせなら彼のいるときに計画がたてられた。ただ、現役の名誉病院長の斎藤氏に許される休暇は最大一五日。そのなかでせっかくペルーに行くならマチュピチュの遺跡も訪ねたいとなると、正味八日ほどが山行の期間となる。そんな条件で山本氏が立ててくれた計画が、アンデス、ブランカ山群にあるペルーの最高峰、ワスカラン(六七六八m)を中心とするリヤンガヌー

検査で岩塩の塊は凶器と判定され大もめにもめた。

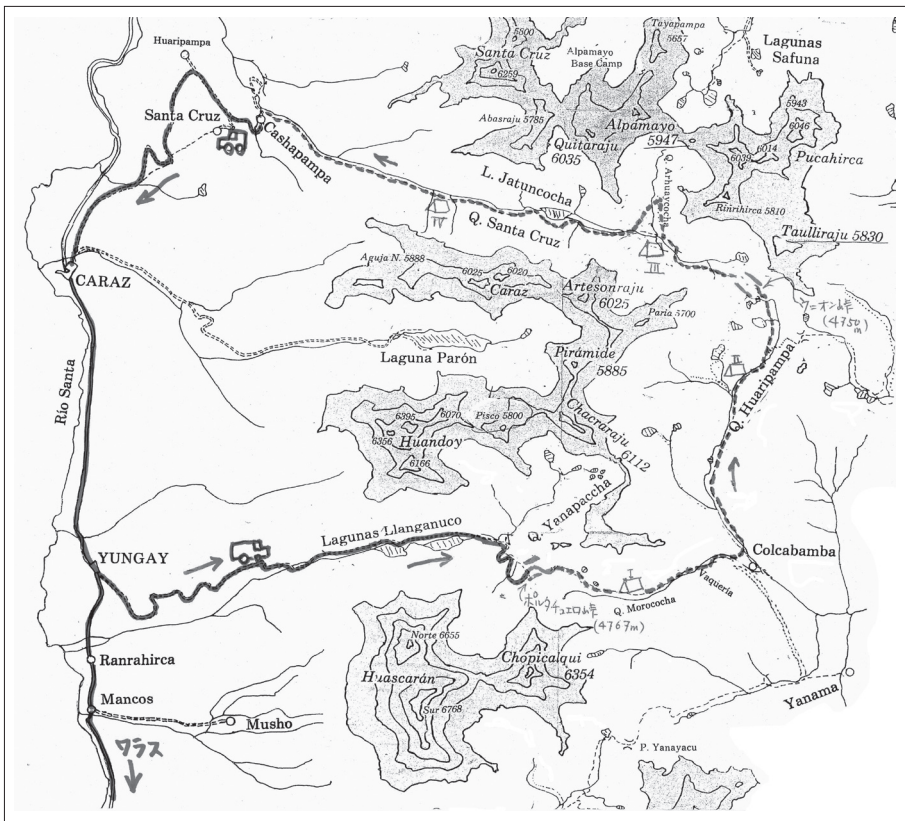
時間があつたのでチェックインカウンターまで戻り本体に入れ直して事無きを得たが要注意。

検査員により判断が異なり小生のみはOKだったが重たいものを担いで成田まで持帰るはめになった。

コ谷からサンタ・クルス谷を巡るトレッキングコース。途中四七五〇mのウニオン峠越えの難所があるが、気候、標高、植生の全てが変化に富み、山や氷河湖の素晴らしい景観が眺められるもつとも人気のあるいわば定番の



朝日に輝くペルー最高峰のワスカラン。左はワンドイ峰。(ワラスのホテルより)



コースである。アプローチの往復二日、高度順化の一日を加えて八日間の山行で、どのピークにも登らないのは少々物足りないが、集まったメンバーの平均年齢七〇歳余のアンデス一年生ではこのあたりが無難なところか。ちなみにブラウン山群を八〇歳のひとがトレッキングしたのは初めてではないかと現地では評判であった。また、植物学者そし

めとけ」と言われ、かえって彼の反骨に火がつきアンデスにのめりこむ。当時アンデスには未踏峰がまだたくさんあったと山本氏は言う。その後アタカマ高地やパタゴニアなどに学術調査隊が組織されAACKの会員も参加するが、AACKが主体となった隊ではない。AACKにとってアンデスはよそさんの山として認識されている

て民族学者の山本氏がフィールド調査の一環として現地参加だけいたおかげで、山行中に氏の実地講義をうけるといふ内容豊富なトレッキングであった。

ところで筆者前田と山本氏とは大学の同級生。彼は探検部、小生は山岳部で活動していた。当時ヒマラヤは鎖国状態でどこからも門戸は開かれず、AACKも開店休業の沈滞期であった。それでも私たち山岳部やAACKは一途にヒマラヤの未踏峰への目を目指していた。そんな中で山本氏はアンデスに目を向けた。しかし探検部の顧問梅棹先生に相談に行く

と、「アンデスは東大のフィールドやないか、やめとけ」と言われ、かえって彼の反骨に火がつきアンデスにのめりこむ。

ようである。七〇〇m以上の山がないのは致し方ないが、五〇〇mあたりまで草原地帯、そんなところでも人が生活し放牧が営まれているのはヒマラヤとは大きく違う。五五〇〇mあたりから雪氷の登攀が始まりあと一〇〇〇mも登れば頂上に達する山ではAACKにとってはその足らぬ山であったのであるか？パイオニアを掲げる京大としてはセクト主義が働いたのであろうか。ともかくAACKにはアンデスは縁のうすい山である。しかし地理的に見てパイオニアを發揮できる未踏峰や未知の地域が僅少になったいま、このアンデスの高地は魅力的である。いまさらAACKの旗をかざして隊を組織する必要はないが、平均年齢の高くなったAACKの会員にはまだまだ活躍出来る山群である。

今回はポピュラーなトレッキングではあるが、AACKにとってアンデスはヒマラヤほどなじみがないのでここに報告するのも何かのお役に立つのではないと思ひ筆を執ってみた。

メンバー

リーダー 斎藤淳生(八〇歳)、寺本 巖(七八歳)、前田 司(六六歳) 以上AACK、JACC京都支部、

田中節子(六九歳)、大槻雅弘(六八歳)、中川 寛(六八歳) 以上JACC京都支部

(現地参加) 山本紀夫(六七歳) AACK、JACC京都支部

(ツアーコンダクター) 中澤道子 ナオツール旅行社派遣 クスコ在住

(ガイド)リカルド ペルー公認アンデスト
レッキングガイド
ほかにサブガイド、コック、馬方二人、馬三
頭、荷運用ロバ八頭

七月四日 長い一日。

成田空港よりコンチネンタル航空でヒュー
ストンまで一二時間、二時間の乗り継ぎで、
リマまで六時間半のフライト。同日二時半
につき山本氏と中澤さんの出迎えを受け、旅
行社ナオツール手配のマイクロバスでリマ新
市内のホテルに入る。南米はやっぱり遠い。

七月五日 リマ滞在。

現地通貨の両替。午後より天野博物館訪問。



リャンガヌーコ谷。右はワンドイ峰。下の二つの氷河湖の
ほとりを走り、ボルタチュエロ・リャンガヌーコ峠までく
るまで登る。

山本氏の引き合わせて創設者天野芳太郎氏
ご夫人と孫の阪根博氏に挨拶。阪根氏の案内
で館内を見学。世界の四大文明に負けぬアン
デス文化のすばらしさを認識する。後リマの
旧市街を観光。本日よりダイアモックス半錠
服用。

七月六日 リマワラス

六時半の朝食時、大槻氏の電話に留守宅よ
り梅棹忠夫先生の訃報が入る。梅棹先生の最
後の弟子の山本氏には大変なショック。日本
では大きなニュースになっていることであ
る。

七時半過ぎ小型バスで出発。海岸べりの道
を北上。リマの郊外を出ると砂漠地帯が始ま
る。ここにびっしりと掘っ立て小屋の集落
が現れる。プエブロ・ホーベン(若い町)と
呼ばれるスラム街である。おそらく上・下水
道の設備もないであろう。地方をはなれ都会
に生活の場を見つけようとした人々がどんど
ん集まってきており、都会の治安も悪化して
いるという。ペルー国家の為政のむつかしさ
を垣間見るようである。

海岸まで迫る砂丘をパン・アメリカンハイ
ウェイ(名前ほどいい道路ではない)が北に
延びる。時折太平洋に注ぐ川の扇状地がオア
シスとなり、そこにはかつて日本からの移民
が入植したサトウキビ畑や麦、バナナの緑が
広がる。リマから二〇〇km北のパティルカで
海岸沿いのハイウェイからワイラス回廊と呼
ばれるブランカ山群への山道に入る。二二時、
この分岐点の海岸レストランで昼食。ペルー

の名物料理の海鮮セビッチエがうまい。一時
発。海拔〇mからいつきに四一〇〇mのコン
コチャ峠まで登る。山岳地帯は日本の山とち
が違ったくの禿山。しばらく進むとからか
らに乾燥した山肌に赤や紫、黄色のじゅうた
んが広がる。これはトウガラシ乾燥場である。
山本氏のフィールド調査に従って写真に収め
る。紫のそれは万願寺トウガラシよりもっと
大きいやつだ。やがて谷が狭まり高度を上げ
てゆく。その急峻な山肌にかろうじて段々畑
が山の上まで作られている。よく見るとある
一線からは緑の作物が植わっている。これ
は灌漑の施設が施されているとのこと。よく
まあこんなところにと感心する。

四時前、コココチャ峠。ここで風景が一
変する。いままで急峻な山の中のつづら折を
登ってきたが、今日の前には壮大な平原がひ
ろがりその奥にめざすブランカ山群の岩と雪
の山並みが見える。その右(南)にはワイワツ
シュ山群がこれに負けじと連なる。しかしこ
のパノラマはあまりに広大すぎて、ヒマラヤ
のような威圧感はない。それだけにどれかひ
とつは登りたくなるような親近感を覚える。
一気に上ってきたからであろう、少々息苦し
い。

ここよりブランカ山群の南北に走る山脈と
平行して西側を走る四〇〇〇m級の山が連な
るネグラ山脈との間を流れるサントタ川に沿
って北上する。日が傾く五時四〇分、ワラス着
(三〇九〇m)。街の高台にあるスイス人経営
のアンデイノホテルに旅装を解く。風呂つき
の快適なホテル。マス料理と控えめのワイン



チョピカルキ峰 (6353m) 北面 この谷はアマゾンに注ぐ。

で明日からの山行の前途を祈る。

七月七日 晴れ 高度順化のため カラン峠
(Callan Punta 4225m) →ワラス

ホテルのテラスよりペルー最高峰のワ
スカラン (Huascarán South 6768m, North
6655m) とその北にワンドイの南北峰
(Handoy North 6356m, South 6160m) のモ
ルゲントロートに魅入る。明日はこの両峰の
間のリングヌーコ谷を遡る。きょうは高度順
化のため、ブランカ山群の東を走るネグラ山
脈のカラン峠まで車で登り、そこから歩いて
ワラス近くまで下る行程。

八時四五分発。ワラスの街を横切り急坂を
一気に一〇〇〇m登る。谷近くはユーカリの

林であるが三五〇〇mを超えると一面草原。
その間に小麦の畑がひろがる。輪作をさせる
ため休耕地が混じる。この自動車道はワラス
から太平洋海岸へ抜ける古いインカの道であ
る。九時半、峠着。東にブランカ山群の岩と
氷の山々が一望出来る。なだらかな草原のな
かに残る石を敷いた古いプレインカ道を大き
な息をしながらゆっくり下る。足元にはチ
チュエと呼ばれる茎がなく地面より直接花をつ
けたタンポポが咲きこが高地であることを
認識させる。途中山本氏の農家調査の同伴を
する。ロバを使った小麦の脱穀やアカザをよ
り分けるインディオの農婦人の仕事ぶり、収
穫したジャガイモを沢の中に一m六〇cmもの
穴を掘って発酵させ独特の抗菌物を作る現場
を見学したりの充実した一日であった。一五
時過ぎホテル着。山行きの用意をする。

七月八日 晴 ワラス→リヤンガヌーコ湖
ポルタチュエロ・リヤンガヌーコ峠→パンパ
マチエ

八時三五分マイクロバスにてホテル発。再
びサンタ川にそって北上。途中カラツの街で
地図などを購入。右手にワスカランの南北の
ピークが全容を現す。やがてユンガイの街に
入る。ここは一九七〇年の大地震で、ワスカ
ラン北峰の巨大雪庇が崩れそれが氷河湖を破
壊してその土石流がこのユンガイの街を埋め
尽くし、一八〇〇〇人の死者を出したとい
う。いまはその少し北に新しい街が作られて、
旧市街は国立墓地になっている。ここよりワ
スカランとワンドイ峰の間に切れ込んだりヤ

ンガヌーコ谷に入ってゆく。部落をはずれ高
度を上げ始めたところにワスカラン国立公園
入山のコントロールオフィスがある。ここで
公園の入山料(一人六五ソール)約二〇〇
円)とトレッキングの届けを提出。黒部の丸
山とオオダテカピンの岩壁を幅二〇〇mぐら
いの谷を挟んで立てかけたような狭い谷を何
度も折り返して高度を上げてゆくと、ぱっと
視界が広がりU字谷となる。やがて真つ青な
氷河湖リヤンガヌーコ・チナコチャが見えて
くる。この湖の入り口で休憩。湖畔はボート
やみやげ物屋のある観光処となっている。こ
こで、ペルーでは家の中で飼われ、祭りなど
のハレの食べ物にするクイ(食用モルモット)
の丸焼きを売っていたので一匹をみんなで食
べる。鶏肉のようで実に美味。つけあわせの
ふかせジャガイモもまたうまい。一二時半出
発。ワスカラン北峰の北面氷河を眺めながら
湖畔を走りさらに二番目の氷河湖リヤンガ
ヌーコ・オルココチャ(三八六三m)を過ぎて、
ポルタチュエロ・リヤンガヌーコ峠(四七六七
m)へつづら折の車道をぐいぐいとのぼる。
行く手にはワスカランの東につづくチョピカ
ルキ峰(六三五四m)がその尖鋒とその落ち
込む氷河の谷の全貌を見せる。一三時四五分
峠に着く。北にはワンドイの四つのピーク、
つづいて東へピスコ (Pisco 5747m)、チャ
クララフ (Chacraraju 6112m)、ヤナパクチャ
(Yanapaqcha 5460m) と三六〇度の豪華な
展望を楽しむ。どれも急峻で手ごわそうだ。
ここより峠の東斜面を再びジグザグに下る。
二〇分ほど走ったところ、四〇〇〇mあたり

で下車。放牧場跡の草原で遅い昼食。ここから今日のキャンプ場三七六〇mのババマチエまで車道を横切りながら一時間ほど歩く。一六時着。峠でみたチョピカルキ峰の北面が夕陽に映える。テントサイトには明日から荷を運んでくれるロバ八頭や三頭の馬も着いている。二人用のテントが三張り、一人用が二張り、食堂の大テント、炊事用テントがすでに用意されていた。炊事テントではコックのアレホがなんとコック帽をかぶりシエフの服装で夕食を準備している。これだけで今回の食事がうまそうに思えた。案にたがわず夕食はクリームスープに始まり、鱒のフライ、ジャガイモほか野菜添え、デザートとどれもわれわれの口に合う味つけである。高山病に



ウニオン峠よりタウリラフ峰西面の氷河湖。立派なブレインカ道が敷かれている。

薬効のあるコカ茶を十分に取り就寝。満天の星空に南十字星を見る。

七月九日 晴 パンパチエーパリア谷出合い

六時起床、チョピカル峰から流れ出る沢は大河アマゾンの源流のひとつである。ゆくゆくは太平洋に注ぐ水で洗面。六時四〇分朝食。七時半過ぎ出発。朝日に輝くアンデスの東にひろがるアマゾン源流域の平原を眺めながら車道を下る。九時前バケリア部落に着く。ここには定期バスも来ており、われわれと反対コースでトレッキングしてきた人はここから車を使って帰ることになる。さてわれわれはここで車道を離れてユルマ川のゴルカバンバ村(三三〇〇m)まで急坂を下る。この坂道で反対回りのトレッカー数パーティと彼らの荷を運ぶロバの群れとすれちがう。一時間足らずで村に達するが、暑い。これからユルマ川のワリパンパ谷を遡ってゆく。ここアンデスの東側は雨量も豊富なためか西側の乾燥地帯よりも畑が豊かで通り過ぎる農家もいくらか裕福なようである。部落を通ると子供たちが出てくる。あまりにかわいいのでカメラを向けたくなるが、撮るだけでは失礼なのでポケットのお菓子をプレゼントする。しかしすぐ種切れになり不公平になる。むつかしいものだ。谷道を二ピッチいったところで大休止。ちょうど伝統的なインディオの服装の子連れの婦人が三人、われわれの前に編み物の帽子などを広げている。このあたりはアルパカはいないので羊の毛という。どれも一五ソルとのこと。買う代わり写真をとらせてもら

う。さらに一ピッチゆくと放牧場となり一二時四〇分ここで昼食(三七〇〇m)。ポテトとアボガドを食す。ところで少し遅れてやってきた山本氏のようなすがおかしい。下痢に嘔吐それに悪寒がするという。斎藤リーダーと田中氏がいろいろと薬を処方するがすぐに戻してしまふ。しばらく草原で横になるが回復せず。ちょうど八〇mほど先にトレッカーや登山者をチェックするコントロールオフィスの建物があったので頼んで寝かせてもらおう。高山病を疑ったが斎藤リーダーは食当たりだろうと診断された。すでに脱水症状も出ているので点滴が必要である。もしこの状態が回復しなければ一番近いYanamaの部落にある病院に運ぶことを考える。とりあえず事態を見守る為、ガイドのリカルド、中澤、前田と馬一頭が残り、一行は一四時サブガイドのマルセリーノとともに本日の泊まり場バリア谷出合いへと出発した。斎藤リーダーから山本氏にクラビット錠とロペラン錠を飲ませるように預かるが、リカルドはその前に吐き気をおさえるためいろいろな薬草を煎じたものを飲ませた。そうして三〇分後預かった新薬を飲ませると戻すことなく服用できた。これが功を奏したのだろう。小康状態になった。そこで山本氏の希望で一晩ここに泊めてもらい様子を見ることにする。サブガイドが一行をキャンプ場まで案内すると山本氏の個人荷を持ってリカルドと交代する為ここへ戻り、最悪のときは彼が病院に連れてゆく手はずをとる。中澤氏と前田は一六時キャンプ場へ発つ。川沿いの道はほとんど川面と同じ高さを



タウリラフ峰 (5830m) 西面。

縫っている。時々湿原となったり奇妙な樹皮のケヌアルの深い森になったりしてパリア谷出会いに続く。正面にはタウリラフの尖鋒 (Taurilrafu 5830m) が翼を広げる。途中戻ってきたマルリーノに合い状況を知らせる。さらにキャンプ地近くになると馬方が迎えに来てくれた。せっかく馬を連れてきてくれたので、初めて馬に乗せてもらおう。この馬には手綱が無く鞍の前をにぎるのである。緊張してやたら足を踏ん張るものだから歩くより足がだるくなった。一七時半キャンプ場に着く。目の前にはパリア峰 (Patria 5600m) が赤く染まっている。一九時ちよっと寂しい夕食。アカザのスープと鶏肉のチャーハン。あいかわらず食欲旺盛である。食事が終わるころり

カルドが戻ってきた。

七月一日 朝のうち霧雨、後曇り、午後遅くより晴れ。パリア谷出会—ウニオン峠—タウジンパンパ

夜中満天の星空であったが朝はどんより雲がかかる。五時起床、五時半朝食。きょうはこのトレッキング最大の山場である四七五〇mのウニオン峠 (Punta Union) 越えである。フレンチトーストのおかわりをするがまだ足らぬので中川さんよりいただいたJALのスカイラーメンでしつかり腹を作る。七時一〇分出発。すこし霧雨なので雨具をつける。ガイドのほうでポンチョを用意してくれたので羽織ってみるが暑いのですぐ脱ぐ。歩き出したところで山本氏が馬でマルセリーノとともに到着した。氏はまだ本調子ではないが馬で同行できるという。ともかくほつとする。昨日のワリパンバ谷をさらにつめる。灌木帯をぬけるころ正面のタウリラフの氷河からのU字谷が広がる。斎藤リーダーと田中氏は馬で先行。途中で山本氏の馬も徒歩組みを追い抜く。二ピッチほどゆくとぼちぼち峠への登りとなりアブレーションパレーをすすむ。雨はすでにやんでいいる。突然リカルドが「コンドル！」と天空を指差す。ちよつと高い空ではあるが確かにコンドルがゆうゆうと弧を描いて飛翔している。デジカメを最大の望遠にして撮影。拡大するとそれらしきものが写っている。さらにモレーンの上をたどり峠下の湖のほとりで昼食。ここから二〇〇mが急な登り。しかしここにもブレインカの古道が作ら

れて峠に続いている。息を整えてゆつくり登る。ウニオン峠は馬が通れるだけの幅一間ほどの岩の切戸である。せまいので先着ごとに下りだす。ゆつくり歩いた中川、中澤と前田組は一四時二五分峠着。右手には東西に分水するタウリラフ峰が聳え、西側に懸垂氷河が落ち込みその下に真つ青の氷河湖をつくっている。ここからまっすぐ西に明日から辿るサント・クルス谷が開ける。U字谷の底はなだらかな草原が広がり、三〇〇mほどの幅の谷の両岸には五〇〇mほどの高さの岩壁が屹立している。峠から高度四〇〇mほど急な下り道であるが、幅一mほどに石を敷いた立派なブレインカ道が残っている。先人の見事な事業に驚嘆する。馬に乗ってではこの下りは危険なので馬組も徒歩である。歩きやすい整備された古道を駆け下る。一息下るとあとはなだらかな草原がつづく。右手にアンデスでもつとも秀麗な山といわれるアルパマヨ峰 (Alpamayo 5947m) が顔をだすと本日の泊まり場タウリパンパ (四二〇〇m) である。この名はタウリとよばれる紫色の花をつけるルピナスが多く生えている草原を意味する。ふりかえるといま越えてきたウニオン峠が、タウリラフ峰の南尾根にナタで切りこんだようにみえる。山本氏も峠からは元気に歩き出し一七時から二〇分のあいだに全員が無事到着。一九時半夕食。牛肉、ピーマン、タマネギの炒め物にライス。ここは今回いちばんの高所でのキャンプ地であるが誰もが血中酸素濃度は八〇前後で元気であった。今夜からダイアモックスの服用はやめる。



アンデスで最も美しい山といわれるアルパマヨ峰 (5947m)の東面。

七月一日 晴れ タウリパンパーアルパマヨ望見ーリヤマコラル

夜中は満天の星だったのでタウリラフやアルパマヨのモルゲンロートに輝くさまをカメラに収めようと六時前より張り切って起きるが高曇り。七時朝食、八時出発。行程に余裕があるのですぐにサンタ・クルス谷を下らず、アルパマヨをもっと真近にながめるためにこの峰のアルワイコーチャ谷へキャンプ地からトラパスしてはいりこむ。この先、湖のある展望処までは遠いのでその半分のところの尾根上からこの美峰を眺める。天気も好転して真つ青な空に真白い三角錐の峰がそそりたちその南東面が隠れることなくみわたせり。登路は正面の氷河からコルに達し、あと

は西面の氷壁を登はんする。鞍部からのリッジはアンデス独特の両面雪庇が出ていて危険だそう。この左にキタラフ峰 (Quitaraun 6036m) が頭上に覆いかぶさってくる。南に目をやるとサンタ・クルス谷を隔てて、ピラミッド (Piramide 5885m) とアルテソ

ラフ峰 (Artesonraju 6025m) が姿を見せる。十分展望を楽しんで、少し戻って急な下り道を通ってサンタ・クルス谷の本道に合流する。谷底の草原は放牧地になっており、牛や馬が草を食んでいる。やがてハトゥンコーチャ湖 (三九〇〇m)、つづいてイチクコーチャ湖 (三八四〇m) のほとりを行く。湖畔には葦に似たトラが生える。チチカカ湖のあし舟に使われているものであるがこれはイネ科の植物である葦はなく、カヤツリグサ科に属し、日本では花むしるなどを編む材料のフトイの仲間だそう。湖からさらに草原の道を二キロ半ほどすすめば今日のキャンプ地リヤマコラル (三七八〇m) に一三時二五分到着。途中北の谷間からサンタ・クルス峰がチラッと顔を見せた。ここのキャンプ地には数パーティがテントを張りにぎやかだ。草原に川が蛇行して流れ馬や牛、それに荷駄のロバが加わる。むかしの笹ヶ峰牧場を思い起こさせる。夕食までたっぷり時間もあり、また最後のキャンプでもあるので、前田が野点をする。無手勝流の下手なお手前でも、この風景がお供なら何とかごまかせるものだ。

夕食はスープにナポリタンスパゲティ。外は満天の星。星が降るといふ表現そのまま。とところで今朝六時一〇分ころドーンという

音とともに地震を感じた。山本氏がペルーの地震は音がするのが特徴だと言う。

七月二日 晴れ リヤマコラルーカシャパンマーワラス

六時起床、七時朝食。お好み焼き。食後最終日のため、ひとり一〇ドルづつ出して、ガイドのリカルド、以下馬方二人までチップとJAC京都支部の三人が持参されたポールペンを斎藤リーダーより手渡される。八時出発。しばらく谷筋をとると下るがやがて両岸が狭くなり急坂を下る。岩混じりの急な道を五、六キロの荷を担いだロバがああ細い脚を巧みに動かして下ってゆくのを感心して見守る。おまけにロバに荷を運ばせると彼らはそこいらの草を食料にするので、ヒマラヤのポーターのように彼等の食料は要らず人件費も馬方二人分で済む。一〇〇mを越す岩壁が両岸に迫る中を抜けるとカシャパンパの部落が近い。一二時半、ユーカーリの林の水辺で昼食。なんと豪勢なバーベキューである。一五〇gはある牛肉にでっかいソーセージ、ふかしたポテト、親指ほどの粒のジャンボコーン。それにサブガイドが部落から冷たいビールを運んでくれた。もう極楽。あと三〇分ほど歩いてカシャパンパの部落。一四時迎えのマイクロバスにのりこむ。ビールと心地よい疲れでうとうとするうち一七時ワラスのホテルに着。夜はホテルのレストランで乾杯。

七月三日 晴 ワラスーリマ

七時二〇分出发。ホテルよりマイクロバス



アルパマヨ峰を背に

でリマへもと来た道に戻る。途中ブランカ山群の北の端のカルバ谷に、百年に一度しか咲かないプーヤ・ライモンディと呼ばれる花が見られるというので寄り道することにする。これはパイナップルの仲間であって八〜一〇mの高さになり、白いゆりのような小花を穂状につけ、花穂を切ると甘い汁がでるといふ。ワラスを出て一時間、パチャコトの村から東へ山道に入る。牧草や屋根葺き、日干し煉瓦の補強材にもなるイチユが一面に生えるなだらかな丘陵地帯を走る。やがて草原のなかにぼつり、ぼつりとプーヤ・ライモンディが現れる。しかしどれも花期を過ぎて花穂は黒く枯れ始めている。花のついたものを探しながら谷奥へと車を走らせるがどうやら少し遅かったよ

うだ。まだ枯れていない株を見つけてるがそれはまだ花をつけていなかった。

途中イチユで屋根を葺いた石造りのチュファと呼ばれる放牧小屋を写真に収める。

コノコチャ峠でアングスの山々と別れ太平洋に向かって四〇〇〇mの急降下。往きの海鮮レストランで遅い昼食。あとはひたすらリマへ。リマ郊外で無秩序な交通ラッシュにまきこまれ時間を食うが、一九時四〇分リマのホテルに帰着。

七月一四日〜七月一九日

リマ〜クスコ〜マチュピチュ遺跡見学〜クスコ〜リマ〜帰国

ペルーへ行くというほとんどどの人は「マチュピチュへ行くかはりますか？」と言われる。どうやら世界遺産No.1のこの遺跡へ行かずしてペルーへ行ったことにならぬようなので、日帰りで訪問。幸い遺跡への汽車が七月一日より再開された。天気にも恵まれ無事見学。三四〇〇mのクスコの街も高度順化した身には平気で行動できた。クスコでさらに一ヶ月アウサンガテ山 (Ausangate 6372m、クスコの東二〇〇km) 山麓のアルカバタ村で調査を続ける山本氏と別れる。

リマから再び長いフライト。おまけに乗り継ぎのヒューストンから成田への便が五時間遅れたため成田でさらに一泊。翌朝全員無事に伊丹空港に帰ってきた。

リマへの往復渡航費(復路の成田→伊丹の航空代含む)

225,940円 (燃料サーチャージ、成田

空港税ほか諸税含む)

ペルー国内旅行費(ナオツール支払い)

228,000円

これにはトレッキング諸費用(ガイド料、ロバ、馬借り上げ代、食事、テント、入山料など)、ホテル七泊代、クスコ往復航空代、マイクロボスチャーター代など。

合計 453,940円

このほかに現地でナオツールのバック旅費に含まれなかった夕食代七回、昼食代四回、チップなどの共通経費として一人US\$290を徴収。また空港税としてリマ国内線用US\$682、国際線用US\$31、クスコUS\$428。

トレッキングを含むペルーの旅費は山本氏の交渉で初期の見積より半値近くも安くしていただいた。

トレッキング中の食事

はじめに示されたメニューを山本氏がチェック。日本人向きにいくらか変更してくれた。調理の味付けもわれわれに合わせてくれたのか、よく口に合いますべて平らげることが出来た。高齢者にもよく配慮された献立であった。

おわりに
費用について

「北極の自然と地球環境」補遺

伊藤 一

二〇一〇年六月一九日、第一五回雲南懇話会が開催され、私にも標記テーマでお話をする機会を与えて頂きました。講演をここに活字で再掲することは無意味なので、当日話さなかつたことを、とりとめもなく書いてみます。(懇話会の概要や、講演の要旨・資料は<http://www.yunnan-k.jp>を参照下さい。写真も何枚か載っています。)

人の話をうっかり聞いてみると、騙されることがあります。話者の恣意や打算・無知が混入しているかもしれません。一般に事の真偽は次のように定義されます。

話の内容が誤っていることを、話者だけが知っている時、この話は「嘘」である。これに対して、聞く方も誤謬を承知している時には、「法螺」と呼ばれる。

そうではなく、話し手、聞き手双方ともに、誤りに気が付かない時、これは「真実」と見なされる。

以下「」内に挙げる記述の真偽を検討してみてください。できれば、引き続き記載された解説を読む前に。もちろん、解説にも虚偽が含まれているかもしれません。騙されないことが肝要です。

「オーロラは極地の夜を彩る現象で、昼間は発生しない。一方、日蝕は極地でも起こるが、

運悪く夜であれば見えない。」

オーロラは地球外から飛来する電磁波に起因する現象である。地球の昼夜、つまり地方時とは無関係に四六時中発生している。ただ、太陽光に比較して、オーロラの光量は微弱である。太陽が輝いている時、あまりにも微弱な光はヒトの目に見えない。計器には記録できる。私自身も白日下にオーロラを鑑賞した経験が無い。

日蝕の方は太陽さえ見えていれば、時刻とは無関係に観察できる。厳冬期には日蝕を見るチャンスがない一方、白夜の季節なら、真夜中でも日蝕を楽しめる。北天低く欠けて行くお日様の姿は、美しくさえあった。北極点の向こう側の日蝕を眺めたことになる。

残念なことに、オーロラと日蝕の同時鑑賞はできない。

「セイウチはクジラに次いで体の大きな哺乳類であるが、幼獣は一年以上もの長期間、母親の保護のもとに養育される。身体は成体に変わらないほど大きくなっても、キバが生えそろうまでには時間がかかるためである。(ある時代・ある地域での)前髪を落とすという少年、あるいは、ヒゲを蓄えていない青年と同じように、キバの無いセイウチは、一人前と見なされないようである。セイウチの社会では体面が尊重される。キバが無いと、見かけが悪く、大人ではない。」

セイウチは海底の貝を食料とする。巨体であるから、大量の貝を食べる。一頭あたり毎日数十キロの貝を消費する。食べるのは中身

だけである。殻は残す。海底で採取した貝を土砂と共に前足で持ち、海面近くまで浮上する。そこで、大きくてざらざらした両前足を擦り合わせると、貝殻は粉碎される。小石や貝殻は海底へ向かって落下する。貝の身も落下するが、軽いのでゆつくりと落ちる。こういった分離作業の後、セイウチは、ようやく食料を口にできる。

一連の食餌過程の冒頭で、貝が潜り込んでいる海底の土砂を大量に掘り起こさなければならぬ。キバは掘削器具である。キバが生えていないと、食事ができない。

「カリブーは、外見がトナカイに似てはいるが、はるかに野性的である。」

カリブーは北極の草木が雪に覆われる冬季、遠く南方へ下り、越冬をする。夏を過ごす北極の草地と越冬地の間を毎年春と秋に移動する。年に一往復の集団大移動である。片道何百キロもの道のりである。渡り鳥と違って、地上を移動するので障害も多い。

出産は北上の途中で行われる。出産中もカリブーの集団は止まらず、移動を続ける。幼獣は、生まれ落ちたその日から、行進に加わる。母親は傍で見守っているが、おんぶや抱っこはしてくれない。前へ進むのには自分の脚だけが頼りである。すさまじい初動生命力である。

トナカイは元々ユーラシア大陸の動物である。ベーリング海峡が凍りついて、歩いて渡れる時期に北米へ移動し、そのまま北米に住み着いたトナカイをカリブーと呼ぶ。やはり

ペーリング海峡を渡り、アメリカ大陸に移住したユーラシア起源の人々をインディアン、インディオと呼ぶのに類似する。

カリブーは元来トナカイと同一動物であるから、一方がとりわけ野性的であるはずがない。ただし、ユーラシアのトナカイは、現在その大部分が家畜化されてしまっている。野生のカリブーが飼育されているトナカイよりも野性的なもの、また、当然の理屈である。

「トナカイの中には赤い鼻を持つ者も居るようであるが、シロクマの鼻は一樣に黒い。真っ白な体に黒一点は目立つ。そのため、氷上に日向ぼっこをするアザラシを襲う時、シロクマは前足で鼻を隠して接近する。」

アザラシの視力は弱い。鼻どころかクマ自体が見えていない。距離を置いてじつと立っていれば、クマであっても、ライオンであっても、アザラシにはその姿が見えず、平気で昼寝を続ける。ただ、時折首を持ち上げて、周囲を見渡す。警戒は怠らないのである。この時、景色を画として記憶している。前回と画が違えば、直ちに穴へ飛び込み、海中へ逃げる。異物の運動のうち、前後（遠ざかる／接近する）の運動は画の一部がわずかに拡大／縮小するだけで、アザラシの目に留まらな

い。これに対して、左右の運動は画の構図を変える。氷丘の左にあった黒点が右に移れば、何者かが視界の中で移動したのである。アザラシは躊躇なく水中へ逃走する。

左右の動きをアザラシに気づかれる。実際に行なってみると、これは簡単な動作ではない。直接アザラシへ向かって進んでは、必ず経路が振れる。アザラシの真後、はるか遠方に第二の目標を取る。アザラシと後方目標を結ぶ直線に沿って進まねばならない。繊細な行進に集中している時、鼻を隠す余裕はない。

「アザラシは海面が氷で閉ざされた季節にも海中に住む。氷に穴を開けて呼吸孔とする。氷の上に出て日向ぼっこのできるシーズンには、呼吸孔は昇降口を兼ねる。直径一メートル足らずの穴を維持している。冬には氷上へ上がる必要がない。息だけでできれば良いので、直径数センチの小さい穴で十分である。無駄に大きくして、クマが入ってきて困る。息を継いだアザラシは魚を求めて潜水する。時には六百メートルの深度に至る。海面には氷が張り詰めている。再浮上しても、息ができるのは、自らの穿った小孔をとおしてだけである。アザラシは六百メートル彼方にある直径十センチ弱の孔へ戻る特殊な能力を身につけている」

い。その一つである。ただただ感嘆しておけばよい。

「冬に出会うシロクマは、何らかの原因で冬眠をしていない変り者である。しばしば凶暴であり、遭遇した場合、格別の注意が必要である。」

日本のクマと違って、シロクマには冬眠をする習慣が無い。冬に巣籠りをするのは、妊娠したメスだけである。嬰兒を食われないうための用心として、雪洞に籠って出産・授乳をする。シロクマは食物連鎖の頂点に君臨する。用心の対象は同族のシロクマである。

冬にも戸外で行動しているシロクマは、オス全部と妊娠していないメスである。夏に出会うシロクマと、あまり変わらない顔ぶれである。変り者扱いをする必要はない。もちろん、変り者でなくても、どのクマも凶暴である。格別の注意を欠いてはならない。

「海水が凍ったものが海水である。海水は海に浮かんでいる。温暖化のために海水が融けても、アルキメデスの原理により、海面位置は変動しない。一方、陸に積もった雪が自重で固まり氷になったものが氷河である。氷河は海に浮かんでいない。温暖化のために陸上の氷河が融けて、融水が海へ流れ込むと、海面は上昇する。」

温暖化は、いくつものメカニズムで海面を上昇させる。その一つが陸水の融解であることには間違いない。他に直接的な海面上昇メカニズムも考えられる。温暖化により既存

の海水の温度が上がる。熱膨張により体積を増やした海水は側面と底面を拘束されているために、上方へ膨れ上がる。海は深い。%であらわされる膨張率と水深を掛け算すると、海面上昇量は大きな数値になる。

陸水の融解による海面上昇は、現状に基づく計算によれば、熱膨張による海面上昇量の割以下である。話の展開によつては無視できる量である。この割合は、温暖化がどの段階まで進んでいるかによつて変わってくる。陸上に存在する氷の量が多ければ多いほど、融解の寄与は大きくなる。氷河期の末には、巨大な氷河が発達していて、海面は今よりも百メートル以上も低かった。温暖化の初期、つまりその巨大な氷河が融け始めた時、海面上昇は主として氷河の融解によつて引き起こされた。現在では、陸上にそれほどの氷河が残っていない。

「温暖化により、北極海を覆う海水面積が減少している。開水面が拡大している。北極海で行動するクジラや他の動物は自由に泳げる遊泳面積が増えて、大喜びである。」

北極海の海洋動物は多かれ少なかれ氷に依存して生存している。正確に言うくと、海水が開水面に接触する水縁が目当てである。そこでは、異なる水塊が接触し、海では稀有な海水の鉛直方向運動が生じる。海面近くの水に栄養が補給される。中低緯度における潮目に匹敵する。豊富な栄養を基にして、微小生物が活動を高める。それを食べようと、小動物が集まる。さらに、中動物が、大動物が、巨

大動物が、と次々に氷縁の給餌活動が高まる。簡単な幾何学の計算から、海水面積が減少すると、氷縁の長さも減少する。連鎖的に食物が不足し、すべての動物の活動が鈍る。クジラも腹が減つては遊泳どころではない。決して喜ばない。

「寒冷な北極で生き延びるのは苛酷である。地球全体の温暖化により、中低緯度ではたしかに生物が住みにくくなる。しかし、こと北極については厳しい環境が緩和され、生物にとっては、かえつて生活が楽になる。」

普通の環境に住めない、あるいは住みたくない生物が北極で暮らしている。そこに至る過程は簡単ではない。低温・暗黒の世界に住めるよう、何世代もかかつて、身体を根本的に改造し、適応を図つてきた。長期間にわたる試行錯誤と努力の結果、ようやく住めるようになったのである。もう暖かい環境では暮らせない体になつている。温暖化により、中緯度から普通の生物が大挙して押し寄せ、再び、北極生物の安住地を奪うのは理不尽である。

(余談) 砂漠を緑化しようという運動がある。と聞く。ヒトが砂漠化してしまつた地域を、責任を取つて元に戻すという運動なら、特に異論はない。しかし、元来の砂漠を人工的に緑化しよう、つまり地球上の耕作可能面積を増やそうという考えには疑問が残る。上と同じ論旨で、せっかく砂漠に適応した生物の住処を奪うのは気の毒である。「無生物」という名称の生物も含めて、砂漠生物には先住権

がある。砂漠に特化した生き物を駆逐したくない。砂漠は砂漠として保全するのが自然である。

「実利と結び付かない登山は、人類だけに許された高適な行為である。北極に住む下等動物は、決して無目的な山登りをしない。」

シロクマは海獣である。主な食料はアザラシであり、海上で捕獲する。しかし、餌に乏ずれば陸上にも獲物を求める。実際、シロクマはどんなものでも食べる。(だから、ヒトも危ない!)もつとも、あまり奥地へは行かない。すぐにアザラシの居る海へ戻れるよう、通常の徘徊区域は沿岸部に限られる。

北緯七五度に位置するカナダ北極のデボン島は氷河に覆われている。頂上部は緩やかに盛り上がった氷であり、標高二千メートルを超える。頂上から南へ下つても、北へ向かつて海岸線までそれぞれ百キロメートル以上の距離がある。北岸から頂上を越えて南岸まで二百余キロメートルはすべて氷雪の広がりである。その間、植生は皆無である。雪虫など微小なものを除けば、動物もいない。つまり、シロクマの餌となるものは何も無い。

頂上付近で、デボン島を北から南へ横断しているシロクマに出会つた。獣相手に、「なぜ山へ登るのですか?」という陳腐な質問を口にしたという衝動に駆られた。飲まず食わずで、百キロメートルのアプローチを走破し、標高二千メートルの山に登頂したシロクマに、一体どのような具象目的があるのだろうか。考えつかない。

北極に住む動物たちは、あるいは、諧謔（か
いぎやく）の世界に悠悠と暮らしている崇高
な生物かもしれない。そのような素晴らしい
場所をヒトの一方的な都合で損傷しないよう
留意したい。

ノシヤック初登頂五十周年記念 会開かれる

AACKノシヤック遠征隊が一九六〇年八
月、初登頂を果たしてから今年で五〇年を迎え
る。そこで当会及び山岳部OB有志二名があ
つまり、八月一日京都の朝日ビヤホールで初
登頂記念会が催された。上田豊会長の挨拶、齋
藤淳生氏の音頭で乾杯のあと、広瀬幸治、酒井



敏明、岩坪五郎
各隊員の話に華
が咲いた。五〇
年たつて明かさ
れた裏話や、ポー
ランド隊から分
けてもらったブ
タンパーナーの
お札に添付し
た「シヨパンの
国から来た同志
へ、サクラ咲く
国からきた二人
のボーイズより」
という粋な手紙

の自画自賛などにぎやかなひと時であった。こ
の九月には、同時に登頂をめざしたポーランド
遠征隊の存命隊員との交流が再現して、登頂隊
員の酒井、岩坪氏を中心とした一五名の交流団
がポーランドを訪問することになった。ひとつ
の遠征の縁を五〇年たつても持ち続けることが
出来る当会の奥の深さがあらわれているよう。こ
の訪問記は次号に掲載する予定。

「梅棹忠夫先生をしのぶ会」の おしらせ

委員長 須藤 健一

(国立民族学博物館長)

副委員長 湯浅 叡子

(財団法人千里文化財団専務理事)

国立民族学博物館初代館長 梅棹忠夫儀去
る平成二二年七月三日逝去いたしました。
つきましては、「梅棹忠夫先生をしのぶ会」
を下記のとおり執り行いますので、お知らせ
いたします。

記

■日時 平成二二年一〇月二〇日（水）

一三時三〇分から一六時三〇分まで

■場所 国立民族学博物館（吹田市千里万博

公園一〇番一号）

※ご遺族の意向により、質素に執り行うこと
とし、式典などは行わず、献花のみといたし
ます。ご来臨の節は、平服にてお越しいただ

きますようお願いいたします。当日は、本館
展示場及び講堂等にて梅棹先生の関連映像・
写真資料を公開する予定です。誠に勝手なが
らご香典・ご供花・ご供物の儀は、固くご辞
退申し上げます。

編集後記

アンデス・トレッキングに向かおうとした
日に、梅棹先生の訃報が入った。つい最近、
「山をたのしむ」と言う本で梅棹先生と対談
された齋藤淳生氏や、「山の世界」を先生と
共著で出版された山本紀夫氏がこのトレッキ
ングのメンバーだけに、先生のお人について
ざーっと話題になった。本誌の編集子として
も、先生の追悼をどのような形でとりあげる
かをトレッキング中考えた。結果、今秋に本
誌の別冊を編むことにしたが、この編集子で
はなんとも心もとない。会員諸氏の応援のほ
どよろしく願います。

次号通刊五五号は一月下旬発行の予定で
す。原稿締め切り一〇月一日。

発行日 二〇一〇年八月末日

発行者 京都大学学芸部 会長 上田 豊

発行所 〒606-8581

京都市左京区吉田本町（総合研究二号館四階）

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究

研究所 竹田晋也 気付

編集人 前田 司

製作 京都市北区小山西花池町一八

(株)土倉事務所